

ルカ福音書の序文と歴史叙述*

山田 耕太

「私達の間で確信されている事柄について、始めからの目撃者でみ言葉に仕えるようになった人々が私達に伝えた通りに、多くの人々が叙述を綴ることを手がけたので、私も最初から全てを正確に調べて、あなたに順序よく書くことにしました。尊敬するテオフィロよ、それは教えられた言葉が確実であることをあなたが知るためです。」（ルカ福音書 1：1-4、私訳）

I

ルカ福音書の序文（1：1-4）は、新約聖書の他の文書には見られない、ヘレニズム・ローマ期の著作の序文という様式を用いている。また、ルカ福音書の序文は、共観福音書の中で著者の執筆動機が明示されている唯一の箇所であり、ルカ文書の著者の文学的意識が最もよく現わされている。そこで、この箇所は短い箇所ではあるが、原始キリスト教の伝承過程、福音書の著作過程や著作目的を研究するのに重要視されてきたが、ルカ文書の文学的ジャンルを知るためにも極めて重要である。

しかし、この箇所には、新約聖書で一回しか使用されていない言葉や（*ἐπειδήπερ, ἀνατάσσεισθαι, αὐτόπτης, παρακολουθεῖν*）、ルカ文書にしか出てこない言葉が（*ἐπιχευεῖν, καθέξης, κράτιστος*）多く見られ、しかもそれぞれの言葉が多義的であるので、数多くの論文や研究書、さらに注解書や辞典の項目等で、その意味がいろいろと論じられてきた。ルカ文書の序文で著者は一体何を述べようとしたのであろうか。本稿は過去の論考の上に、新しい視点を加えようとする一つの試みである。

一般的に言って、ヘレニズム・ローマ期の著作の序文は、どんな目的のために書かれたのであろうか。アリストテレスは弁論の序論について、「これは悲劇で言えば、序詞、笛の演奏で言えば、序曲に該当し⁽¹⁾」、

その目的は「主題が何であるかを明らかにすることにある⁽²⁾」と述べている。また、アリストテレスによれば、弁論の序文は、(1)聞き手の注意を引き付け、(2)聞き手に受容力を与え、(3)好意を抱かせる、という働きをした⁽³⁾。ヘレニズム・ローマ期の著作の序文も、同じような役割を果たすために書かれたと思われる。

さて、ルカ福音書の序文は、福音書のみを対象として書かれたのであろうか⁽⁴⁾。それとも、ルカ福音書と使徒言行録を併せたルカ文書全体に対する序文として書かれたのであろうか⁽⁵⁾。この問題は語義を詮索するだけでは解決できないと思われる。ヘレニズム・ローマ期の著作家は、しばしば何巻にも分かれた著作の第一巻に全体の序文を書き、第二巻以降に、前巻の内容を要約したりして、それぞれの巻の序文を書く習慣があった。エフォロスとそれに倣ったディオドロス以来、ヘレニズム・ローマ期の歴史家も、しばしばこのような習慣に従っていた⁽⁶⁾。ルカ文書の著者も、第二巻である序文で第一巻の内容を要約していることから明らかなように、このような習慣に従って、第一巻であるルカ福音書の冒頭で作品全体の序文を書いたのである。この点においては、キャドベリーの指摘は正しい⁽⁷⁾。

II

さて、キャドベリーはこのような大前提に立ちつつ、ルカ文書の序文の「私達」(ルカ1:1, 2)と、使徒言行録の所謂「われら章句」(使徒16:10-17, 20:5-15, 21:1-18, 27:1-28)の「私達」とを関連づけて、ルカ文書の著者がパウロの同行者であった、という伝統的な見解を取る。そして、ルカ福音書の序文の“*παρηκολουθηκότι*”という言葉が、それまで考えられてきた「調べる」という意味ではなく、「参与する」という意味である、と解釈し直した⁽⁸⁾。その上で、ルカ福音書の序文に関して、詳細な注解を書き上げた⁽⁹⁾。それはその後、特に英語圏やフランス語圏などで決定的な影響力を与え続けてきた⁽¹⁰⁾。これに対してドイツ語圏のヘンヒェンやクラインらは、ルカ福音書の序文の「私達」と「われら章句」の「私達」を区別し、“*παρηκολουθηκότι*”は「参与する」ではなく、「調べる」という意味である、という見解を支持した⁽¹¹⁾。

だが、もしキャドベリーが主張するように、ルカ文書の著者が目撃者

やパウロの同行者として一連の出来事に直接的に参与していたのであるならば、第一に、ルカ福音書の序文で明確に区別されている(1)「始めからの目撃者でみ言葉に仕えるようになった人々」と、(2)伝承を書きつけて「叙述を綴ることを手がけた」「多くの人々」と、(3)「最初から全てを正確に調べて、順序よく書くことにし」ている「私」、という伝承過程で明らかに異なる三つの世代のうち、「私」をも目撃者なり同行者と同一視することによって、(1)と(3)の世代の区別を不明瞭にするのである。第二に、キャドベリーは「私達の間で確信されている事柄」の「私達」と、「始めからの目撃者でみ言葉に仕えるようになった人々が私達に伝えた通りに」の「私達」とを区別しなければならなくなり、前者をキリスト教徒一般と受け取り、後者をルカ文書の著者の世代の人々と解釈しなければならないのである。こうして、「私達」という同じ言葉に対して、指示内容を変えなければならないのである。これらの点で、キャドベリーの解釈には無理があるのである。

ところが、最近になって、マンチェスター大学の新進の女性の新約学者アレクサンダーは、キャドベリーよりも一層詳しくルカ文書の序文を研究して博士論文に纏めるばかりでなく、1993年にはそれを書き改めた研究書を出版した⁽¹²⁾。また、その要点はほぼ同名の雑誌論文にも要約されている⁽¹³⁾。その詳細な議論の中で、以下の点がわれわれの視点から見て重要である。第一に、アレクサンダーによれば、ギリシア・ローマ時代の歴史的著作の序文は、ルカ福音書の序文より長く、序文と本文の区別は、ルカ福音書のように明確ではない。第二に、ギリシアの歴史家は序文を慣習的に三人称で書き、また二人称の呼びかけを序文の中で用いることはない。このような理由で、アレクサンダーはルカ福音書の序文を歴史的著作の序文と見做すことはできないと主張する。

アレクサンダーはこのような見解に代えて、ルカ福音書の序文は、一般的に短い文章で書かれ、本文とは明確に区別され、著者が一人称で語り、しばしば二人称で呼びかける「ラベルと呼びかけ」形式で書かれた、科学的著作の序文である、という独自の見解を打ち立てる。この場合の「科学的」という概念は、現代的な意味で用いられているのではなく、ギリシア・ローマの古代社会で用いられていた、医学、哲学、数学、工学、修辞学から星占術や夢解釈までも含んだ、専門的ないしは職業的な領域全てを指す言葉である。そして、ルカ福音書の序文の構文ばかりでなく語彙も、科学的著作の序文に平行箇所があることを、おびたしい証拠を用いて例証しようとする。そして、ルカ福音書の序文に構文的構

造が最も似た例として、紀元前4世紀のカリスタノスのディオクレス著『アンティゴノス宛書簡』序文、紀元前1世紀のデメトリウス著『書簡様式論』序文、1、2世紀のアレクサンドリアのヘロー著『靈魂論』第1巻序文、2世紀のガレノス著『類型論』序文を挙げる。こうして、ルカ文書の著者がガレノスと同じ医者である、という伝統的な見解を明確に肯定も否定もしないが、ギリシア語圏の職人の世界との強い関連を示唆するのである。だが、果たしてそうであろうか。

まず第一に、ルカ福音書の序文が他の歴史的著作の序文と比較して短い（1文章、42単語）、というアレクサンダーの指摘に関してであるが、科学的著作にもルカ福音書の序文よりも長いものもあり（例、アルキメデス『方法』序文）、また歴史的著作にもルカ文書のように極めて短いものもあった（例、ヘロドトス『歴史』第1巻序文、1文章、39単語）。すなわち、序文の長さはその様式とは基本的に関係ないのである。さらに、歴史的著作の長い序文に対する批判や、長い序文を慎む傾向もあったことを指摘しておかなければならない⁽¹⁴⁾。また、歴史的著作の序文には、以下で述べるように数種類（全体の序文は2種類、それに第2巻以後の序文を併せると3種類）あり、歴史的出来事の原因や概要を含んだ序文（*προέθεσις*）は長くなる傾向があり、ルカ福音書の序文のように、それらを欠くもの（*προορασίη*）は短くなり、序文と本文が明確に区別される傾向があったのである。

第二に、歴史的著作の序文が三人称で書かれるのに対して、ルカ福音書の序文が一人称で書かれ、その中には二人称の呼びかけがある、という点に関してであるが、歴史家が序文では三人称で語る習慣は、ヘロドトスやトゥーキューディデースなどの古典期の歴史家に見られるのであり、ヘレニズム・ローマ期の歴史家は、本文では三人称で語るが、序文では一人称で語るのが、むしろ慣例となっていたのである⁽¹⁵⁾。また、二人称の呼びかけは、序文の形式やジャンルに関係するのではなく、著者と最初の読者との親密さに関係するのである。

スターの研究によると、ローマ世界で作家のテキストは三つの段階を経て広まっていった⁽¹⁶⁾。すなわち、（1）著者が直接的に知っている友人達、という内側のサークルの段階（親しい友人達の前での著者による朗読、献辞の記されている人への著者による献呈、献呈された人の友人間での朗読・回読など）、（2）著者が直接的に知らない友人の友人達、という外側のサークルの段階（著者が知らない友人の友人達の間での朗読・回読・書写、書写したものの贈呈など）、（3）本を取り扱う

商人による商いの段階、である。

もし、著作家のテキストが以上のような過程を経て広まっていき、またルカ文書もほぼ同じように似た過程を経て広まっていったとするならば、ルカ文書は恐らく上記の(1)の段階の内側のサークルを意識して書かれたと思われる。なぜならば、外側のサークルを意識した作品は、通例、序文の中で著者の名前が記されており(例、ヨセフス『ユダヤ戦記』)、また本を取り扱う商人を意識した作品は献呈者も著者も記されない傾向があったが、ルカ文書の序文には献呈された人の名前しか記されておらず、著者の名前は記されていないからである。すなわち、著者は内側のサークルの人々に顔を知られている人物であり、あえて名前を記す必要がなかったと思われるからである。以上のように考えると、献呈された人への二人称の呼びかけは、序文の様式の問題ではなく、著作家のテキストが広まっていく過程と関係する問題であり、言い換えれば、著者と最初の読者の親密さの問題に帰されるのである。

第三に、ルカ福音書の序文の主要な語彙は、歴史的著作の序文で慣習的に用いられる語彙と共通するものが多い⁽¹⁷⁾。だが、アレクサンダーは、これらの語彙が科学的著作の序文にも共通に見られることを例証するために、おびただしい例を集めて明らかにしようとする。ところが、構文的構造がルカ文書と最も似ているものとして挙げられた、先程述べた四つの科学的著作の序文には、“ἀκριβῶς”の名詞形一つを除いてルカ福音書の序文に特徴的な主要な語彙が見られないのである。すなわち、語彙のみでは、科学的著作の序文か、歴史的著作の序文か、決定的な判断はできないのである。むしろ、アレクサンダーが見落としている歴史的著作の序文の構造をも分析しなければならない。そして、その歴史的著作の序文の構造との関連で共通する語彙が見られるか否かが問題なのである。以上のような理由から、ルカ福音書の序文は、アレクサンダーが想定した「ラベルと呼びかけ」という形式の科学的著作の序文である、という主張は説得力がないのである。

III

ヘレニズム・ローマ期の歴史的著作には、必ずしも序文が付いていたわけではなかったが⁽¹⁸⁾、序文の付いている歴史的著作では、序文はどのような構造をもっていたのであろうか。ルキアノスは歴史的著作の序文

の構成要素として二つ挙げている。一つは、歴史の主題の重要性、必然性、有用性などを示すことであり、もう一つは、歴史的出来事の原因と概要を示すことであると言い、その代表例として、ヘロドトスとトゥーキューディデースの序文を挙げる⁽¹⁹⁾。

リーズ大学のドナルド・アールは、このようなルキアノスの指摘に基づき、その上に歴史的著作の主題という要素を加えて、歴史的著作の序文は、(1)主題の提示、(2)主題の重要性、(3)歴史の概要、という三つの要素で構成されていたと主張する⁽²⁰⁾。そして、このような序文の様式が、ヘロドトスやトゥーキューディデースからアッピアノス、ヨセフス、リヴィウス、フロールスを経て、7世紀のベードにまで見られると言う。

しかし、ヘレニズム・ローマ期の歴史的著作の序文をよく観察すると、さらに細かな構成要素によって成り立っていると思われる。すなわち、(a)主題とその重要性、(b)先行者に対する批判、(c)資料ないしは著者の資格、(d)歴史的出来事の原因と概要、(e)歴史叙述の目的、以上の五項目であるが、これらの構成要素は、時には順序が入れ替わったり、また時にはある構成要素を欠いたりすることもある。

(a) 主題。歴史叙述で対象とする事柄が、しばしば序文の最初に述べられる傾向がある。ある時には簡潔に、またある時には詳細に述べられる⁽²¹⁾。これはヘロドトス以来一貫して述べられてきた。それとともに、歴史叙述で取り扱われる主題の重要性が述べられることも多い⁽²²⁾。

(b) 先行者批判。歴史家が取り扱う同じ主題に対する、それ以前の歴史家の取り扱いが不充分であり、新たに歴史を書く必要性が述べられる⁽²³⁾。これはヘカタイオスやトゥーキューディデース以来の伝統である。

(c) 資料・資格。ヘレニズム・ローマ期の歴史家はしばしば資料について述べる。あるいは自分が見聞したことについて記述しようする場合であれば、資料について述べる代わりに、歴史家として語る資格について述べる⁽²⁴⁾。

(d) 原因・概要。ヘレニズム・ローマ期の歴史家は、しばしばこれから取り扱おうとする歴史的出来事がどのような原因で起きたのかを述べたり⁽²⁵⁾、これから述べようとする歴史の概要を記す⁽²⁶⁾。これはトゥーキューディデース以来の伝統である。

(e) 目的。歴史家は何のために歴史を書くのか、という歴史叙述の目的を序文で明らかにしている。これは時には序文の半ばで述べられるが、しばしば序文の最後に来る⁽²⁷⁾。ヘロドトス以来の伝統である。

以上のような構成要素を考慮に入れると、歴史的著作の序文は、第1巻に書かれた作品全体に対する序文と、第2巻以降の各巻の序文とに大きく分けることができるが、前者は(d)の原因・概要を欠くヘロドトスの『歴史』以来の“*προγραφή*”という序文の類型と⁽²⁸⁾、それを含むトゥーキューディデースの『戦史』以来の“*προέκθεσις*”という序文の類型に分けられる⁽²⁹⁾。また、後者は前巻の内容を簡潔に要約した“*ἀνακεφαλαίωσις*”という序文の類型になる。

さて、ルカ福音書の序文は、このようなヘレニズム・ローマ期の歴史的著作の序文の構造と比較して分析すると以下ようになる。すなわち、

(a) ルカ福音書1章1節の“*περὶ*”以下では、「私達の間で確信されていることについて」というルカ文書の主題が極めて簡潔に述べられているのである。「確信されていること」とは、十字架と復活を中心としたイエス・キリストの出来事、すなわち福音とその展開である。

(b) 「多くの人々が叙述を綴ることを手がけたので」(1節)という表現は先行者について言及している。また、「最初から全てを正確に調べて、あなたに順序よく書くことにしました」(3節)という表現の中には、先行者に対する批判の意味合いが込められている。すなわち、先行者の叙述が不十分であり、もう一度徹底的に調べて、叙述し直す意図が述べられているのである。

(c) 「始めからの目撃者でみ言葉に仕えるようになった人々が私達に伝えた通りに」(2節)という表現には、「伝えた」という口頭伝承を現わす用語が用いられている。また「多くの人々が、叙述を綴ることを手がけたので」(1節)という表現には、既にいくつかの文書伝承の存在が前提にされている。さらに、「最初から全てを正確に調べて、あなたに順序よく書くことにしました」(3節)という表現には、これらの口頭伝承や文書伝承という資料の取り扱い方が言及されているのである。

(d) ルカ福音書の序文は、極めて短く書かれており、歴史的出来事の原因や概要に相当するものを欠いている。

(e) 「それは教えられた言葉が確実であることをあなたがたが知るためです」(4節)という表現には、ルカ文書の著作目的が明確に述べられているのである。

以上のことから明らかのように、ルカ福音書の序文は、ヘレニズム・ローマ期の歴史的著作の序文の構造、特に“*προγραφή*”という類型の序文の構造様式と一致している。また、ルカ文書の第2巻である使徒言行

録の序文では（使徒1：1－2）、福音書の内容が極めて簡潔に要約されているので“ἀνακεφαλαιώσις”という序文の様式に従っているのである。

IV

このように、ルカ文書の著者はヘレニズム・ローマ期の科学的著作の序文ではなく、歴史的著作の序文の伝統に則って序文を書いているのである。また、ルカ福音書の序文には、新約聖書に一回しか出てこない言葉やルカ文書にしか出てこない言葉を中心にして、歴史的著作の序文に慣習的に用いられている語彙が多く見られるばかりでなく、それらのうちのいくつかには修辞学的な要素も見られるのである。

第一は、ルカ文書の主題に関して用いられている“πεπληροφορημένων”である。これは“πληρῶν”と“φορεῖν”という動詞の合成動詞の完了受動分詞形であるが、多義的であり、次の三通りの意味が可能である。すなわち、（1）「成し遂げられた⁽³⁰⁾」、（2）「確信された⁽³¹⁾」、（3）「成就された⁽³²⁾」、以上の三つの意味である。特に、この言葉は旧約聖書の成就という神学的概念と結びつけられて、“πληροφορεῖν”が“πληρῶν”とほぼ同義の言葉であると理解され、（1）ないしは（3）の意味に解釈される場合がほとんどである。しかし、レンクシュトルフやグルントマンが注解書で正しく指摘しているように「確信された」ないしは「確信されている」という意味も含み得るのである⁽³³⁾。むしろ、ルカ文書の著作目的は、伝えられた教えが「確実であること」（ἀσφάλεια）を明らかにすることであるならば、「私達の間で成し遂げられた事柄」ないしは「私達の間で成就された事柄」と解釈するよりは、「私達の間で確信されている事柄」と解釈する方が、ルカ文書の主題と著作目的の対応関係が明確になり、首尾一貫するのである。すなわち、「私達の間で確信されている事柄」が「確実であることを」読者に伝えるのである。もしこのような解釈が正しければ、この“πληροφορεῖν”という動詞は、“πληροφολία”（「確信」）という修辞学の用語と密接に関連しているのである。すなわち、修辞学とは一言で表現すれば相手を説得する技術であるが⁽³⁴⁾、言い換えれば、説得される相手に確信を与える方法なのである。このように解釈すると、ルカ文書の修辞学的意図が明確になるのである。

第二は、ルカ文書の著者の先行者批判に関して用いられている“πολλοί”である。“πολλός”という言葉とその関連語が、ギリシアの古典期から、演説や弁論の導入部に用いられてきた修辭的な言葉であることは、既に多くの研究者によって指摘されてきた⁽³⁵⁾。この「多くの人々」という先行者に対して、一方では、「(伝えた)通りに」(καθώς)という言葉や「私も(書くことに)しました(すなわち、決めました)」(ἔδοξε κἀμοί)という語句からも、ルカ文書の著者が先例に倣って書き、先例ををモデルとする肯定的な姿勢が見られる⁽³⁶⁾。だが、他方では、先例が十分でないことを暗示する言葉、すなわち「最初から全てを正確に(あるいは詳しく)調べて、あなたに順序よく書くことにしました」を書き加えることによって、先例に対して否定的な姿勢をも併せて示しているのである⁽³⁷⁾。このように、ルカ文書の著者が肯定的にかつ否定的に評価する「多くの人々」とは、長年の研究の蓄積から既に明らかにされたように、具体的にはルカ文書の中に取り入れられた先例、すなわちマルコ福音書と“Q”(イエスの語録資料)の主に二つである。それはとりわけ、伝承に忠実であることが明らかにされてきた“Q”による部分よりも、ルカ福音書に枠組みを与えつつ改変されたマルコ福音書が念頭に置かれているのである。このような僅かな先例に対して「多くの人々」と誇張して強調しているのは、修辭学的手法によるのである。こうして「始めから」(ἀπ’ ἀρχῆς)という語句によって伝承の古さに訴えると同時に、「多くの人々」という誇張した表現によって資料の多さに訴えて、説得力を得ようとしているのである。

第三は、資料の取り扱いに関して用いられている“καθεξῆς”である。この副詞も多義的で、さまざまな意味に解釈され議論されてきた。例えば、歴史的著作の序文でしばしば見られる“ἐξῆς”(「次から次へと」あるいは「以下に続くように」)と同義であると解釈する立場の人もある⁽³⁸⁾。確かに、ルカ文書で用いられている“καθεξῆς”のうち、何箇所かは“ἐξῆς”と同義に用いられているが⁽³⁹⁾、「順序よく」という別な意味で用いられている箇所もある⁽⁴⁰⁾。すなわち、すべてが同義だというわけではない。これに対して、クラインは「年代順に構成された」という意味で、この箇所を解釈し⁽⁴¹⁾、フェルケルは「事物に即して構成された」という意味合いで解釈する⁽⁴²⁾。先に指摘したように、“καθεξῆς”にも先行者批判のトーンが引き続き見られるとするならば、「次から次へと」とか「以下に続くように」という消極的な意味ではなく、「年代順に構成された」とか「事物に即して構成された」という積極的な意味合いを

含む言葉として解釈するほうが適切である。ところが、ルカ文書で全体の枠組みとして用いられたマルコ福音書は、様式史の研究で明らかにされたように、その断片（ペリコーペ）が歴史や伝記のように年代順に書かれているわけでもなく、またそれを改変したルカ福音書は、例えばナザレの会堂の説教（ルカ5章）がガリラヤ宣教の最初に置かれ、イエスの主題説教として位置づけられている一例からも明らかなように、マルコ福音書を素材にしつつも必ずしも年代順に再構成されているわけではない。このような点を考慮に入れると、この箇所“καθεξής”は、「事物に即して構成された」というニュアンスを含む「順序よく」と解釈するのがふさわしいと思われる。もし以上のような解釈が正しければ、このような意味での“καθεξής”という言葉は、修辞学で用いる“ἐν τάξει”ないしは“κατὰ τάξιν”（「秩序よく」）という表現と、極めて似ていると思われる。

ルキアノスは、歴史家の仕事として、文書や伝承を集めた後に、まず最初に美しさも流れもない一連の「覚え書き」（*ὑπομνήματα*）を作り、それに「秩序を与え」（*ἐπιθεὶς τὴν τάξιν*）こうして作品に美しさ、文体表現、様式、リズムを与えるのである、と述べている⁽⁴³⁾。このような視点で見ると、序文の構成からも明らかなように、文学的な意味での歴史家として意識して著作しているルカ文書の著者は、恐らくマルコ福音書を手にした時、まだ修辞学的な意味での秩序が与えられていない「覚え書き」として受け取ったのであろう⁽⁴⁴⁾。そして、“Q”資料やその他の伝承を用いて、（1）誕生物語（ルカ1、2章）を導入することによって、マルコ福音書の唐突な始まりを改めて、美しい序幕劇から始め、（2）復活物語（ルカ24章）にいくつかの別の伝承を挿入することによって、不完全で中途半端な印象を与える結末を補い、（3）中間部（ルカ9：51-18：14）でサマリア旅行を挿入して、イエスの振る舞いや言葉などの不十分な描写を補って、マルコ福音書のガリラヤの部とエルサレムの部という二部構成から、ガリラヤの部、サマリアの部、エルサレムの部という三部構成に仕立てて節目をつけ、（4）野の説教（ルカ6：17-49）や弟子派遣の説教（ルカ10：1-12）などで演説の少なさを補い、（5）ナザレの会堂の説教でイエスの説教の主題を明確にしてアクセントを付け、さらに福音書と相当量の第二巻である使徒言行録を書くことによって、マルコ福音書以後の時代のギャップを埋めたのである。“καθεξής”とは、このようにしてマルコ福音書という「覚え書き」に「秩序を与え」る、という意味での修辞学的ニュアンスを含んだ言葉な

のである。

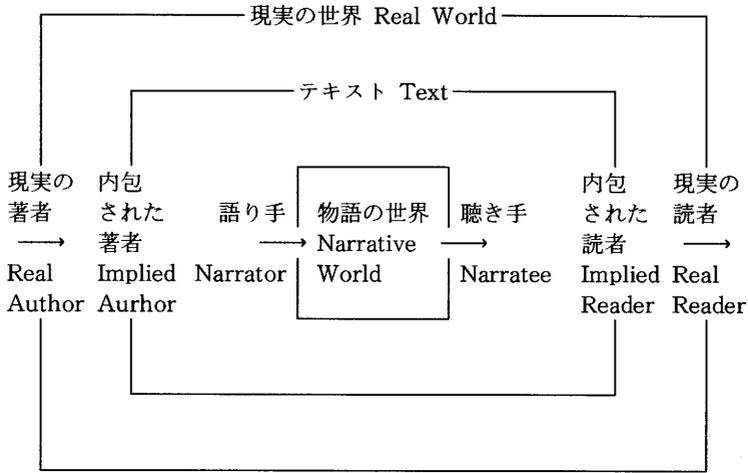
第四に、ルカ福音書の著作目的との関連で用いられている“ἀσφάλεια”である。これは「確実さ」とか「安全」などの意味をもつ多義的な言葉である。ギリシアの古典期以来、ほとんどの歴史的著作は「真理」(ἀληθεία)のためか、「有益さ」(ὠφελεία)のためか、「楽しみ」(ψυχαγωγία)のために書かれてきた。しかし、ルカ文書は「確実さ」ないしは「安全」のために書かれたのである。だが、これを「真理」のため、と同一視してはならない⁽⁴⁵⁾。そうではなく、この“ἀσφάλεια”は、前に述べたように“πληροφιλία”(「確信」)という言葉と同じく、修辞学の用語なのである。すなわち、相手を説得し、相手に確実であると思わせて確信させる技術で用いられる言葉である。ルカ文書はこのような修辞学的な説得の目標である「確実さ」を読み手に与えようとして書かれているのである。また、その説得の方法は二通りあり、証人の証言や文書を用いて説得の技術によらない方法(ἀτεχνή)と、修辞学の技術を用いる方法(ἐν τεχνῇ)とがあった。ここでルカ文書の著者は、修辞家として論証しようとするのではなく、歴史家として証言や資料を用いようとするのである。しかし、それらに「秩序を与え」て叙述する際には、ただ単なる歴史家としてではなく、文学的な意味での歴史家、すなわち修辞的な手法を多用した修辞学的な歴史家として物語るのである。

V

以上の議論から明らかなように、ルカ文書の序文はアレクサンダーが主張したような科学的著作の序文ではなく、かえって足早に議論をして見過ごしてしまった歴史的著作の序文であり、またその中には修辞学的意図が読み取れるのである。換言すれば、ルカ文書の主題は、相手を「説得する」(πειθεῖν)ことによって「信」(πίστεως)に到らしめるための「確信されている事柄」である。また、それは口頭伝承から書き下ろされた「多くの人々」と言うが、実はマルコ福音書という先例に倣いつつもそれを批判し、その他の伝承や資料を用いて秩序立てて「順序よく」書き直し、また新たに書き加えられたものである。そして、伝承されてきたことが「確実である」ことを読者に知らせる目的で書かれているのである。ヘレニズム・ローマ期の歴史叙述には、大きく分けて政治的歴史叙述と修辞学的歴史叙述の二つの傾向があったが、ルカ文書の歴史叙

述は文学的要素を取り入れ、読者を説得することを目的とした後者の流れに属するのである⁽⁴⁶⁾。

さて、著者とか読者と言ってもさまざまな段階の著者と読者が考えられるが、われわれは現実の著者 (real author) について、何を知り得るのであろうか。現実の著者は伝統的にはパウロの協力者「医者ルカ」(コロサイ4:14, IIテモテ4:11, フィレモン11) に帰されてきたが、このような伝承は2世紀末の『ムラトリ正典目録』にまで遡るのである⁽⁴⁷⁾。だが、これ以上古い伝承はない。また、原初のテキストには『ルカによる(福音書)』(Κατὰ Λούκαν) や『使徒言行録』(Πράξεις Ἀποστόλων) という表題もなかったのである。むしろ、これらの表題は後の時代に写本に書き加えられたのである。ルカ文書の第1巻と第2巻にそれぞれ別な表題が付けられていることからそれは明らかである。すなわち、表題が付けられた時点では、既に第1巻と第2巻が切り離されて、それぞれ福音書と言行録という別なジャンルのものとして理解されていたことを示しているからである。さらに、ルカ文書には医者が用いる医学用語が見られるということがしばしば指摘されたが、既に今世紀の始めにキャドベリーは、医学用語とされる言葉は医者に限らず、知識人であるギリシア・ローマの著作家が用いる言葉であり、ここから著者が医者であるかどうかは判断できないことを明らかにし、このような議論の根拠がないことを決定的にした⁽⁴⁸⁾。以上のように、現実の著者については、ほとんど何も分からないのである。しかし、第三福音書は伝統的にルカ福音書と呼び習わされてきたので、「ルカ」という呼称を用いるが、それはルカ文書の著者が歴史的な人物の「医者ルカ」であるという意味ではない。これに対して、テキストに内包された著者 (implied author) は、男性であり⁽⁴⁹⁾、恐らく読者のサークルには顔を知られており、著者が自分の名前を記す必要がないほど親密な関係にあったことが前提にされ、また修辞学的な歴史家であったことなどが序文から明らかにされる。さらに、序文の中に登場する「私」あるいは「私達」という1人称は、現実の著者ではなく、内包された著者でもなく、主人公イエス、その敵対者である宗教的権力者、イエスに従う弟子達やその後継者、民衆やユダヤ人などの人物が登場する、ルカ文書という文学的世界 (narrative world) を歴史物語として物語る語り手 (narrator) を指していると思われる⁽⁵⁰⁾。



現実の読者は、一体誰だったのであろうか。序文には「テオフィロ」という人物に献呈された言葉が見られる。果たしてこのテオフィロなる人物がどのような人であったのか、あるいは実在したのか否か、などがいろいろと論じられてきた。まず第一に、「尊敬するテオフィロ」という表現に見られる「尊敬する」(*κράτιστος*)という尊称についてであるが、これはローマの官僚制社会では、騎士階層の総督に用いる尊称であったので(使徒23:26, 24:3, 26:25)、テオフィロはローマの高官であった、と論じられることがある。しかし、この尊称は必ずしもローマの官僚制の社会のみで用いられた言葉ではなく、それ以外の社会ではある特定の階層に限定せずに、目上の人などに尊敬の意味を込めて用いられていた尊称であり⁽⁵¹⁾、これだけからはローマの高官であったかどうか断言できないのである。第二に、「それは教えられたことが確実であることをあなたが知ることで」という一文から、テオフィロは洗礼志願者ないしはキリスト教徒である、とも言われる。「教えられた」(*κατηχηθης*)という言葉から、教理問答(catechism)で教えられ洗礼に与かる、「洗礼志願者」(*κατηχούμενος*)という用語が派生するが、まだこの時代にはこのように限定された意味をもってはいなかったのである。また、キリスト教の教えを受けていた人であることは明らかであるが、これだけからはそれがキリスト教徒であったか否かは断定できないのである。第三に、献呈された人は出版人であった、とも主張される⁽⁵²⁾。確かに、ケクロが数多くの手紙を書いた友人アティクスはケクロの出版人で

あり、ヨセフスの『ユダヤ古代誌』や『アピオン反駁』が献呈されているエパフロディトスはヨセフスの著作の出版人であった⁽⁵³⁾。だが、献呈された人がしばしばパトロンであったり出版人であったからと言って、献呈された人が必ずしもパトロンなり出版人であったとは限らないのである。以上のように、テオフィロという人物についてさまざまなことが考えられるのであるが、いずれも断言しがたいのである。すなわち、われわれは現実の読者についてはほとんど何も知り得ないのである。序文のテキストに内包された読者 (implied reader) は、キリスト教の教えを受けてはいるが、修辭学的な意味で説得される対象となっている。「テオフィロ」というのは、むしろルカ文書という歴史物語の世界の聴き手 (narratee) なのである。その際には、テオフィロ (Θεοφίλος) という名前は「神の友」(θεοφίλος) という象徴的な意味を持つのである。すなわち、この物語の世界では神の言葉に説得されて神の味方になることが求められているのであり、神の言葉に反抗して「神の敵」(θεομάχος) となることが警告されているのである (使徒 5 : 39) ⁽⁵⁴⁾。

以上のように、ルカ文書の序文からは現実の著者も現実の読者も明らかではないが、そこではテキストに内包された著者が修辭学的な歴史叙述によって、内包された読者を説得しようとする意図が明確に読み取れるのである。そして、序文に登場する「私」ないしは「私達」は、その物語の世界の語り手であり、「テオフィロ」はその聴き手なのである。この語り手である「私」ないしは「私達」と聴き手である「テオフィロ」の間に、主人公イエス、弟子達、民衆、宗教的権力者を中心とした登場人物群の歴史物語の世界が展開されるのである。このようにして、ルカ福音書の序文には、ルカ文書の著者の修辭学的歴史叙述のプログラムが述べられているのである。

註

*本稿は、1993年9月27、28日に東京神学大学で開かれた、日本新約学会第33回学術大会で発表した「ルカ文書の序文と修辞学的歴史」という論文の原稿を書き改めたものである。その要旨は、『新約学研究』第22号（1994年5月）に掲載されている。

1. Aristoteles, *Ars Rhetorica*, 3.14.1 [1414b]. 邦訳は、アリストテレス『弁論術』戸塚七郎訳 岩波文庫, 1992年による。以下同じ。
2. Aristoteles, *Ars Rhetorica*, 3.14.6 [1415a].
3. Aristoteles, *Ars Rhetorica*, 3.14.7 [1415a-b]; Anaximenes, *Ars Rhetorica*, 29 [1436a,b]; Cicero, *De Inventione Rhetorica*, 1.15.20, 1.16.22-23; Ps.Cicero, *Auctor ad Herennium*, 1.4.6, 1.7.11; Quintilianus, *Institutio Oratoria*, 4.1.5.
4. E.g., E.Haenchen, "Das 'Wir' in der Apostelgeschichte und das Itinerar," *Zeitschrift für Theologie und Kirche* 58 (1961), 329-366, esp. 362; idem, *Die Apostelgeschichte* (KEK Bd. III, 7. Aufl.), Göttingen, 1977, 143 n.3; H. Conzelmann, *Die Mitte der Zeit*, (4. Aufl.), Tübingen 1962, =田川建三訳, 『時の中心—ルカ神学の研究』新教出版社, 1965年, 33頁 注4; idem, *Die Apostelgeschichte* (HNT 7, 2. Aufl.), Tübingen 1972, 24-25; H.Schürmann, "Evangelien-schrift und Kirchliche Unterweisung: Die repräsentative Funktion der Schrift nach Lk 1, 1-4," idem, *Traditionsgeschichtliche Untersuchungen zu den synoptischen Evangelien*, Düsseldorf 1968, 251-271; idem, *Das Lukasevangelium* (HTKNT III), Freiburg 1969, vol.1, 1-17; G.Schneider, "Der Zweck des lukanischen Doppelwerks," *Biblische Zeitschrift* 21 (1977), 45-66; idem, *Die Apostelgeschichte* (HTKNT V), Freiburg 1980, vol.1, 81; S.Brown, "The Role of the Prologue in Determining the Purpose of Luke-Acts," C.H.Talbert(ed.), *Perspectives on Luke-Acts*, Danville/Eginburgh 1978, 99-111; R.J.Dillon, "Previewing Luke's Project from His Prologue (Luke 1:1-4)," *Catholic Biblical Quarterly* 43 (1981), 205-227, esp.206 n.3, 217 n.37; E.Schweizer, *Das Evangelium nach Lukas* (NTD 3), Göttingen 1986, 11; 加山久夫「ルカ福音書の序文にみる使信と伝達」『聖書の使信と伝達—関根正雄先生喜寿記念論文集』山本書店 1989年, 419-429, 特に426頁注1.
5. E.g., H.Cadbury, "Commentary on the Preface of Luke," F.J. Foakes Jackson & K.Lake (eds.), *The Beginnings of Christianity*, London 1922, vol.2, 489-510, esp.421-422; J.M.Creed, *The Gospel According to St. Luke*, London 1930, 1; G.Klein "Lukas 1,1-4 als theologisches Programm," E.Dinkler (Hrsg.), *Zeit und*

- Geschichte: Dankesgabe an Rudolf Bultmann zum 80. Geburtstag*, Tübingen 1964, 170–203; A.J.B.Higgins, “The Preface to Luke and the Kerygma in Acts,” W.W.Gasque & R.P.Martin (eds.), *Apostolic History and the Gospel: Biblical and Historical Essays Presented to F.F.Bruce*, Exeter/Grand Rapids 1970, 78–91, esp.78–79; E.Klostermann, *Das Lukasevangelium* (HNT 5, 3. Aufl.), Tübingen 1975, 1; W.G.Kümmel, *Introduction to the New Testament*, London 1975 (orig. *Einleitung in das Neue Testament*, Heidelberg 1973), 128.
6. E.g., Polybius; Josephus, *Antiquitates Judaicae*, vol.8,13,14. Cf., R.Laqueur, “Ephoros 1. Die Poömien,” *Hermes* 46 (1911), 161–206; K.S. Sacks, “The Lesser Prooemia of Diodorus Siculus,” *Hermes* 110 (1982), 434–443.
 7. Cadbury, “Commentary.”
 8. H.Cadbury, “The Knowledge Claimed in Luke’s Preface,” *The Expositor* 24 (1922), 401–420; idem, “‘We’ and ‘I’ Passages in Luke–Acts,” *New Testament Studies* 3 (1956), 128–132.
 9. Cadbury, “Commentary.”
 10. E.g., J.H.Ropes, “St.Luke’s Preface; ἀσφάλεια καὶ παρακολοθεῖν,” *Journal of Theological Studies* 25 (1923/24), 67–71; E.Trocme, *Le “Livre des Actes” et l’histoire*, Paris 1957=田川建三訳『使徒行伝と歴史』新教出版社 1969年; J.Dupont, *The Sources of Acts: The Present Position*, London/New York 1964 (orig. *Les sources du Livre des Actes: État de la question*, Brügges 1960); Higgins, “The Preface,”; 土屋博「原始キリスト教における歴史記述の問題」『三笠宮殿下還曆記念オリエント学論集』講談社 1975年, 262–268頁。しかし、古典学者のホルソン、文法学者のロバートソンらは、キャドベリーの解釈に反対意見を表明。F.H.Colson, “Notes on St.Luke’s Preface,” *Journal of Theological Studies* 24 (1922/23), 300–309; A.T.Robertson, “The Implications in Luke’s Preface,” *The Expository Times* 35 (1923/24), 319–321.
 11. Haenchen, “Das ‘Wir’”; Klein, “Lukas 1,1–4.”
 12. L.Alexander, *The Preface to Luke’s Gospel: Literary Convention and Social Context in Luke 1.1–4 and Acts 1.1*, Cambridge 1993.
 13. L.Alexander, “Luke’s Preface in the Context of Greek Preface–Writing,” *Novum Testamentum* 28 (1986), 48–74.
 14. Lucianus, *Quomodo Historia Conscribenda Sit*, 23; 第2マカベヤ書 2:32, 「前置きはこれぐらいにして話を始めることにしよう。いつまでも物語の入り口にとどまって、本題をおろそかにするのは愚かなことである」
 15. 1人称複数「われら」, Polybius; 2 Maccabees; Livius etc.: 1人称単数「私」, Dionysius Halicarnassensis; Josephus *Antiquitates Judaicae*, *Bellum Judaicum*; Tacitus, *Historia*; Appianus; Dio

Cassius etc.

16. R.J.Starr, "The Circulation of Literary Text in the Roman World," *Classical Quarterly* 37 (1987), 213-223.
17. E.g., *ἐπειδήπερ*, Josephus, *Bellum*, 1.1.17; *ἐπιχειροῦν*, Dionysius, 1.7.3; *ἀθήρησις*, Dionysius, 1.8.2, Josephus, *Antiquitates*, 1.67; *πρόγραμμα*, Polybius, 1.1.3, Josephus, *Antiquitates*, 1.26. *αὐτόπτης* (*αὐτοφία*), *καθεξῆς* (*ἐξῆς*),あるいは *ἀκριβῶς* (*ἀκριβεία*) に関連する言葉は、数多く見られる。ルカ福音書の序文に似た一例として、以下に一部分を示すように、これらの語彙が集中的に用いられ、歴史叙述の序文の慣例的表現であることは明らかである。Josephus, *Bellum*, 1.17: *ἐπειδήπερ καὶ Ἰουδαίων πολλοὶ πρὸ ἐμοῦ τὰ τῶν προγόνων συνετάξαντο μετ' ἀκριβείας*.
また、以下の論文は、ルカ福音書の序文が歴史叙述である、という立場に立って書かれている。W.C.van Unnik, "The 'Book of Acts' the Confirmation of the Gospel," *Novum Testamentum* 4 (1960), 25-59; idem, "Remarks on the Purpose of Luke's Historical Writings (Luke I 1-4)," *Sparsa Collecta*, Leiden 1973, vol.1, 6-15; D.J.Sneen, "An Exegesis of Luke 1:1-4 with Special Regard to Luke's Purpose as a Historian," *The Expository Times* 83 (1971/72), 40-43; I.I.du Plessis, "Once More: The Purpose of Luke's Prologue (Lk I 1-4)," *Novum Testamentum* 16 (1972), 259-271; T.Callan, "The Preface of Luke-Acts and Historiography," *New Testament Studies* 31 (1985), 576-581; C.J.Hemer, *The Book of Acts in the Setting of Hellenistic History*, Tübingen 1989, 321-328
18. E.g., Tacitus, *Annales*. Lucianus, *Quomodo*, 23 では、序文のない歴史的著作が「頭のない体」に譬えられている。
19. Lucianus, *Quomodo*, 53.
20. D.Earl, "Prologue-form in Ancient Historiography," H.Temporoni (Hrsg.), *Aufstieg und Niedergang der römischen Welt*, vol.I, 1/2 (1972), 842-856.
21. E.g., Polybius, 1.1.1-6; Dionysius, 1.1-3; Josephus, *Bellum*, 1.1(1), *Antiquitates*, 1.5-9(2); 2 Maccabees, 2:19-23; Livius, 1.1-5.
22. E.g., Polybius, 1.2.1-8; Dionysius, 1.4; Josephus, *Bellum*, 1.13-16(5).
23. E.g., Polybius, 1.4.1-9; Dionysius, 1.6; Josephus, *Bellum*, 1.2(1), 7-8(3), *Antiquitates*, 1.1-3(1), 2 Maccabees 2:24.
24. E.g., Dionysius, 1.7; Josephus, *Bellum*, 1.3(1), 17-18(6), *Antiquitates*, 1.10-26((3)-(4)); Livius, 1.6-9; Dio Cassius, 1.2.
25. E.g., Josephus, *Bellum*, 1.4-5(2).
26. E.g., Polybius, 1.5.1-5; Dionysius, 1.8; Josephus, *Bellum*, 1.19-30((7)-(12)).

27. E.g., Polybius, 1.4.10-11; Dionysius, 1.5; Josephus, *Bellum*, 1.9-12(4), *Antiquitates*, 1.4(1), 2 Maccabees 2:25-32; Livius, 1.10-13, Dio Cassius, 1.3.
28. E.g., Josephus, *Antiquitates*; 2 Maccabees; Livius; Dio Cassius. *προγράφη, προέδραεις, ἀνακεφαλαίωσις* については、Laqueur “Ephoros.”; Cadbury, “Commentary,” 491 n.1 参照。だが、ここでは、必ずしもこれらの見解に従っているわけではなく、相違するこれらの概念規定をかなり修正して用いている。
29. E.g., Polybius; Dionysius; Josephus, *Bellum*.
30. E.g., A.Plummer, *The Gospel According to S.Luke* (ICC), Edinburgh 1901, 3; Cadbury, “Commentary,” 495-496; Klostermann, *Lukasevangelium*, 2; Brown, “Role,” 102-103; Dillon, “Previewing,” 221-222, etc.
31. E.g., K.H.Rengstorf, *Das Evangelium nach Lukas* (NTD 3), Göttingen 1974, 43-44; W.Grundmann, *Das Evangelium nach Lukas* (THKNT III), Berlin 1978, 43-44.
32. E.g., Creed, *St.Luke*, 3; I.H.Marshall, *Gospel of Luke* (NICNT) Exeter 1978, 41; J.A.Fitzmyer, *Gospel According to St.Luke* (AB) New York 1981, vol.1, 293, etc.
33. H.G. Liddell, R.Scott, S.Jones & R.McKenzie, *A Greek-English Lexicon* (Rev.ed.1968); W.Bauer, W.F.Arndt & F.W.Gingrich, *A Greek-English Lexicon of the New Testament and Other Christian Literature* (4th rev.ed. 1973) は、事物が主語の受動形では「確信される」という意味では用いないとし、ほとんどの注解書がこれらの辞書の指示に従っているが、例えば、フィラデルフィア宛イグナティオス書簡序では、制度的教会が主語で「確信された」という意味で用いられている場合がある。
34. E.g., Plato, *Gorgias*, 453a, “πειθοῦς δημιουργός ἐστιν ἡ βητορικὴ”; Aristoteles, *Ars Rhetorica*, 1.2; Cicero, *Inventione*, 2.2.6; Quintilianus, *Institutio*, 2.15.13.
35. J.Bauer, “ΠΙΘΑΟΙ LUKE I.1,” *Novum Testamentum* 4 (1960), 263-266.
36. Cadbury, “Commentary,” 493-494; Schürmann, *Lukasevangelium*, vol.1, 7; Brown, “Role,” 103; Marshall, *Luke*, 41; Schneider, *Apostelgeschichte*, vol.1, 38; Schweizer, *Lukas*, 11.
37. Klein, Conzelmann, Haenchen らは、ルカ文書の他の2例の *ἐπιχειρεῖν* が否定的なニュアンスを含むことに基づいて、先行者に対して否定的である、と主張する。これに対して、G.E.Sterling, *Historiography & Self-definition: Josephus, Luke-Acts & Apologetic Historiography*, Leiden 1992, 341-345 では、先行者に対してアンビヴァレントであるとし、その例として、Josephus, *Antiquitates*, 1.10-13 を挙げる。
38. Cadbury, “Commentary,” 505; J.Kürzinger, “Lk 1,3:...

- ἀκριβῶς καθεξῆς σοι γράψαι,” *Biblische Zeitschrift* 18 (1974), 249–255; Brown, “Role.”
39. ルカ8:1, 使徒3:24, 18:23.
40. 使徒11:4. Cf. ἐξῆς, ルカ7:11, 9:37, 使徒21:1, 25:17, 27:18.
41. Klein, “Lukas 1,1–4,” 195, “chronologisch strukturiert.” さらに、年代的・歴史的順序については、Schürmann, *Lukasevangelium*, vol. 1, 12; Marshall, *Luke*, 43, 参照。Schneider, “Zur Bedeutung von καθεξῆς im lukanischen Doppelwerk,” *Zeitschrift für die neutestamentliche Wissenschaft* 68 (1977), 128–131; idem, *Apostelgeschichte*, vol. 1, 39 は、これに教済史的ニュアンスを加える。
42. M. Völkel, “Exegetische Erwägungen zum Verständnis des Begriffs καθεξῆς im lukanischen Prolog,” *New Testament Studies*, 20 (1973/74), 289–299, esp. 249 “sachlich strukturiert.” F. Mußner, “Καθεξῆς im Lukasprolog,” E. E. Ellis & E. Gräßer (Hrsg.), *Jesus und Paulus: Festschrift für W. G. Kümmel zum 70. Geburtstag*, Göttingen 1975, 253–255 はフェルケルの理解の上に「完全に、例外なく」(lückenlos ohne Ausnahme) というニュアンスを付け加える。
43. Lucianus, *Quomodo*, 48.
44. マルコ福音書を主人公イエスと敵対者である宗教的権力者、ならびに弟子と民衆の葛藤物語として構造を分析した、拙稿「福音書の文学批評—マルコ福音書」『いずみ』第84号(1994年), 1–4頁をも参照。ルカ文書は基本的にはマルコ福音書の葛藤物語の枠組を受け継いでいる。
45. Bauer, *Lexicon*; van Unnik, “Confirmation,” etc. は、「真理」と「確実さ」をほぼ同一視している。
46. 政治的歴史叙述と修辞学的歴史叙述の違い、またそれらを含めたルカ文書のジャンルについては、拙稿「使徒行伝のジャンル」『新約学研究』第20号(1992年), 1–17頁; K. Yamada, “A Rhetorical History: The Literary Genre of the Acts of the Apostles,” P. J. J. Botha & J. Vorster (eds.), *Rhetoric and Religion*, Sheffield forthcoming, 参照。
- 尚、本稿と関連して、また違った視点から修辞学的意図を読み取ろうとする試みは、以下を参照。F. H. Colson, “Τάξις in Papias,” *Journal of Theological Studies* 24 (1922/23), 62–69; W. S. Kurz, “Hellenistic Rhetoric in the Christological Proof of Luke-Acts,” *Catholic Biblical Quarterly* 42 (1980), 171–195; E. Güttgemanns, “In welchem Sinne ist Lukas ‘Historiker’?: Die Beziehungen von Luk 1,1–4 und Papias zur antiken Rhetorik,” *Linguistica Biblica* 54 (1983), 9–26; F. Siegert, “Lukas—ein Historiker, d. h. ein Rhetor?” *Linguistica Biblica* 55 (1984), 57–60.
47. *Canon Muratori*, “tertio euangelii librum secundo lucan / lucas iste medicus post acensum χρσ. / cum eo paulus quasi ut iuris studiosum / secundum adsumsisset numeni suo / ex opinione concriset dmn tamen nec ipse / duidit in carne et idem pro

- asequi potuit. / ita et ad natiuitate iohannis incipet dicere,” (lines 2-8); cf. H.J.Cadbury, “The Tradition,” F.J.Foakes Jackson & K.Lake (eds.), *The Beginning of Christianity*, London 1922, vol.2, 209-264; C.K.Barrett, *The Acts of the Apostles* (ICC), Edinburgh 1994, vol.1, 30-48.
48. W.K.Hobart, *The Medical Language of St.Luke*, Dublin 1892, に対して、H.Cadbury, *Style and Literary Method of Luke*, Cambridge (Mass.) 1920; idem, *The Making of Luke-Acts*, (New York 1927) London 1958, 219-220.
49. “παρηκολουθήσεται”は“παρακολουθεῖν,”の能動相完了分詞男性単数形与格。
50. 大貫隆『福音書研究と文学社会学』岩波書店 1992年, 52-54頁は、「私」を「虚構の語り手」とし、「テオピロ (テオフィロ)」を「虚構の受け手」とする。
51. E.g., Josephus, *Vita*, 430, *Contra Apionem*, 1.1, エバフロディトに「尊敬する」という尊称が修飾されているが、エバフロディトは解放奴隷であった。
52. E.J.Goodspeed, “Some Greek Notes I: Was Theophilus Luke’s Publisher?” *Journal of Biblical Literature* 73 (1954), 84; Haenchen, *Apostelgeschichte*, 143 n.4.
53. Josephus, *Vita*, 430, *Antiquitates*, 1.1.2, *Apionem*, 1.1
54. 使徒言行録はギリシア悲劇以来の“θεομάχια”という文学的トポスと密接に関連する。Cf, W.Nestle, “Legenden vom Tod der Gottesverächter,” *Archiv für Religionswissenschaft* 33 (1936), 246-269; J.Kamerbeek, “On the Conception of θεομάχος in Relation with Greek Tragedy,” *Mnemosyne*(4) 1 (1948), 271-283.

The Preface to Luke's Gospel and the Historiography

Kota Yamada

The Preface to Luke's Gospel covers the whole Lukan writings, and the preface to the Acts of the Apostles, the second volume, summarizes the contents of Luke's Gospel, the first volume. This follows the conventional custom of Greco-Roman literary tradition. But recently, L. Alexander states in *The Preface to Luke's Gospel*, Cambridge 1993, that the Luke's preface is not a historical one, but a scientific one written in the form of "label + address."

First, concerning her point that Luke's preface is shorter than other historical ones, some scientific ones are longer and some historical ones are shorter than Luke's one. Thus the length is not so much related to the form of prefaces. Second, concerning her point that historical prefaces are written in the third person but Luke's one is written in the first person with the address, it is rather conventional to use the first person in the historical ones in Hellenistic-Roman periods (plural, Polybius, 2 Maccabees, Livius, etc.; singular, Dionysius Halicarnassensis, Josephus, Tacitus, Appianus, Dio Cassius etc.). The address in the second person is not related to the form of the preface but to the intimate relationship between the author and the original reader. Third, the rare words in Luke's preface are typical of historical ones, but Alexander tries to testify these words also seen in scientific ones with a number of examples. But such kind of typical vocabulary is hardly seen in the most similar scientific ones to Luke's one in terms of structure. Hence, Alexander's position is not convincing.

When we observe the remaining historical prefaces in the Hellenistic-Roman periods, we come to the conclusions that

they consist of following five elements; (a) the subject, (b) criticism of the predecessors, (c) the source or qualification, (d) the origin or summary of the events, and (e) the purpose of writing: and that there are three types of historical prefaces: (1) *προγραφή*, excluding (d), (2) *προέκθεσις*, including (d), and (3) *ἀνακεφαλαίωσις*, that is, a brief summary of the preceding volume.

Luke's preface follows the pattern of *προγραφή*, as evident from followings: (a) the subject, "concerning the events that have been convinced among us" (v.1); (b) criticism of the predecessors, "insomuch as many people took in hand to draw up a narrative" (v.1), "it seemed good to me also that I write to you in order, investigating everything from the very beginning accurately" (v.3); (c) the source, "insomuch as many people took in hand to draw up a narrative, just as the original eyewitnesses and ministers of the Word transmitted the traditions to us" (v.1-2); and (e) the purpose, "most excellent Theophilus, in order that you might know the certainty of the words that you were instructed" (v.4). On the other hand, the preface to the Acts of the Apostles is an *ἀνακεφαλαίωσις*.

Rhetorical elements are also seen in Luke's preface. For example, *πεπληροφορημένων* is neither "have been fulfilled" nor "have been accomplished" but "have been convinced" because the purpose of writing the narrative is to give the reader *ἀσφάλεια* ("certainty"). That is, it should be interpreted as the subject of the historical narrative to be coincident with the purpose of writing: "in order that you might know the *certainty* of the words," "concerning the events that have been *convinced* among us." Both *πληροφορία* and *ἀσφάλεια* are rhetorical terms. Further, *πολλοί* ("many people") is a rhetorical emphasis so as to stress the quantity of the sources, though actually referring to mainly two, Mark and Q, with the emphasis on the quality of the traditions ("the original eyewitnesses and ministers of the Word"). Moreover, *καθεξῆς* ("in order") indicates the rhetorical *ἐν τάξει* or *κατὰ τάξιν* ("well arranged" or "well ordered"). The

author of the Lukan writings must have accepted the predecessors, Mark's Gospel and Q, as *ὑπομνημάτα* ("a memoir and a memorandum"), and "put them in order" (*ἐπιθεῖς τὴν τάξιν*, cf. Lucianus, *Quomodo*, 48).

Thus, the preface to Luke's Gospel reveals the programme of the rhetorical historiography of the whole Lukan writings. In it "I" refers to the narrator, neither the real author nor the implied author, and "Theophilus" to the narratee, neither the real reader nor the implied reader. The historical narrative world of *dramatis personae* (Jesus the hero, the disciples, the people and the religious authorities the antagonists) is discoursed between them.